

“すすんで質問したり、発表したりする”積極的な構えや、“やってみないとわからない”から“とにかくとりくんでみたい”とする積極的な構えがよくみられる。

### ③ 教師にみられる変容

実験研究をすすめる中で、教師の指導の構えにも、はっきりした変容がみられる。そのおもなるものをひろいあげてみると、つぎようになる。

ア. 研究の意欲がさかんであり、まじめである。

イ. 相互の協力体制が深まってきている。

ウ. 教材研究の構えも深まり、質も高まっている。

エ. 子どもの認識や思考のすじみちに配慮した発問や助言のしかたが深まってきている。

オ. 板書のしかたにもいろいろのくふうがみられ、子どものノートづくりに対する指導にも、細かな配慮がみられる。

カ. たしかめながら学習をすすめる手だてや、あいまいなところをはっきりさせる指導の手だてが、たいへん深まってきている。

一時間一時間の授業を充実したものにするため、学年ごとの研究協議や教科ごとの研究を積極的に重ねながら、主体的にとりくんでいる姿がよくみられる。④ 家庭の協力体制

実験研究にとりくんだ当初は、いろいろの設備をしなければならないのではないかとか、親たちでも教えられるのだろうかなどの疑問や不安がみられた。しかし研究実践をすすめる中に、しだいに協力体制ができた。

たとえば、次の資料などから、そのことをうかがいしることができよう。

〈勉強の場所〉	38年6月	40年6月
ア. きまっている	59.5%	83.4%
イ. きまっていない	40.5	16.4
総人数(人)	348	349

〈ラジオやテレビの聴取〉	38年6月	40年6月
ア. なるべく聞かない	44.0%	53.6%
イ. 音を低くしてきく	38.5	39.8
ウ. ふつうと同じ	17.5	6.6
総人数(人)	348	349

子どもの勉強机や勉強の場所も、必ずしも独立した部屋ではなくとも、固定されたところで、おちついてやれるようにしてやったり、子どもの勉強中は、できるだけ音を低くするなどの配慮をしたりする。構えがみられるようになってきている。また、近隣の子どもや親たちとの話し合いにより“ただ今勉強中”という木札を戸口に掲げて、お互いの勉強の邪魔にならないようにしていると報告もうけている。

子どもたちが、おちついて学習にとりくめるようなふん囲気をつくるとか、環境を整えるとかの構えが、はっきり認められるようになってきている。

以上、子どもや教師、家庭の協力などについて、ごく一部の変容の資料を掲げてきたが研究実践に

とりくんだ当初よりは、その趣旨や方法もわかり、技術の習練もなされて、着々と望ましい方向に変わりつつある姿をよみとることができる。

### (4) 今後の問題点のみとおし

以上、4ヵ年継続してとりくんできたこの研究の概要についてのべてきた。これをまとめてみると、つぎのようないくつかの問題点や、今後に残されていることがわかる。

① この研究の理論については必ずしも正しい理解を得ていないのではないだろうか。

この研究は、あくまでアクションリサーチによる研究であるので、実験学校の成果をこのままただちに適用はできない。また、予習的課題だけが実験対象でもない。

子どもの生活のリズムの層の中で、学習指導の充実をはかっていかなければならない。

② 指導のバランスがくずれてはならない。

この研究は、4教科の指導にまたがって、じゅうぶんやれるものとする。しかし、子どもの過度の負担をきたさないよう心がけることがたいせつである。

③ 学校における教育課程の4領域にわたって実践されるものとする。

それぞれの領域の性格をよくぎんみしながら、全体としての調和を考えて実践しなければならない。

④ 中学校や高等学校にも適用されるものとする。

しかし、このことは、ただちに“学習の手びき”をつくって与えればすむものではない。しかも、予習的課題は、年度当初などに事前につくり、与えるといったものではないことを再確認しなければならない。

⑤ 地域社会全体に対する実験研究が、急務なのではないだろうか。

一つの実験学校による研究には、それなりにいくつかの制約をうける。望ましい人間形成をめざす学習指導の充実のためには、地域における小、中学校の共通の研究体制が必要であると考えられる。それだけに、地域教育の振興をめざした実験地区の体制をつくるのが急務ではないだろうかと考えるのである。

くわしくは、昭和41年3月にだす予定の研究紀要第52号を参照されたい。そして、ひとりでも多くの方々から、実践をとおしてご批判、ご意見をよせられることを期待する。

## 3 複式学級の学習指導法の研究

——プログラム学習をとり入れた学習指導——

### (1) 研究の目的

本県の複式学級は年々減少しているとはいえ、小学校で348学級(全学級数の4.7%)児童数5,916名(以上昭和39年5月現在)をかかえている。特にへき地では、学級総数の約40%が複式学級であり、学習指導上大きな困難点となっている。

複式学級の学習指導上の問題点や困難点の多くは文献や調査の結果からうかがうことができる。特に間接指導の在り方は、複式学級の学習指導充実のため大きな問題点となっている。